

昆虫類 039	トンボ目 イトトンボ科	岡崎市 準絶滅危惧
モートンイトトンボ <i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、静岡県で絶滅危惧Ⅱ類とされ、愛知県においては、準絶滅危惧に指定されている。岡崎市では、稲熊町、小美町、生平町、大井野町、岡町、康生町、鶴巣町、富永町、竜泉寺町の各町で1975年から1980年の岡崎市史の調査時に記録されている。その後は、須渚町で写真により確認をしたが、確実な産地としてあげられる場所はない。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	準絶滅危惧

【 種の概要 】

体長 30mm 程で、♂は胸部が黄緑色で黒斑があり腹部後半は橙赤色で美しい。未熟な♀は全身が橙黄色で黒斑はない。成熟すると緑色になり、背面に黒条が現れる。

北海道から九州まで広く分布するが、産地は限られるという。愛知県内での分布は、豊橋市、蒲郡市、設楽町、豊田市、名古屋市、瀬戸市、犬山市、長久手市などである。平地から丘陵地の水田や休耕田に見られ、ハラビロトンボやヒメアカネなどと混棲することが多いと言われている。

岡崎市内をはじめ各既産地では、湿地環境の著しい減少に伴い、激減したものと考えられる。休耕田や丘陵地の湿地では、耕地や地権者にその環境の保全や復元の協力を依頼することが必要であると思われる。未熟個体も成熟個体もほとんど発生地から移動することがなく、環境の変化には抗うことができない。



岡崎市須渚町，1996年7月6日，鈴木栄二 撮影

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 040	トンボ目 ヤンマ科	岡崎市 準絶滅危惧
マルタンヤンマ <i>Anaciaeschna martini</i> (Selys)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、岐阜県で準絶滅危惧に指定されている。岡崎市では、1980年に森越町の神社で確認された。その後、須渚町のため池からは多くの個体が発生していることが知られている。しかし、市内での産地は他にない。発生する平地や丘陵地の止水域が宅地開発や水質の悪化などの原因で減少している。現在のところ、須渚町のため池は開発の心配はないが、水生植物の管理をし、水位や水質の保全をしたい。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長 80mm 内外で、未熟のうち、胸に黄色の斑紋がある。成熟すると♂は鮮やかなコバルトブルーに変化する。また、♀の翅は褐色になり、付け根付近が特に濃くなる。

国内では、主に東北から九州にかけて分布し、愛知県では豊橋市、新城市、名古屋市、春日井市、稲沢市、瀬戸市、長久手市が産地として知られている。また、県内のどこの産地においても多産することはない。

岡崎市須渚町での観察では、幼虫は水生植物の根ざわや沈積物の陰に潜っており、羽化は6月下旬から始まり、7月上旬にピークをむかえる。羽化は主に夜間で夜明け前にはほとんどの個体が飛び去っている。未熟な時期は水域から離れ、付近の樹林に移動することが知られている。成虫は、たそがれに活動し、明るい時間帯は水域近くの林間で静止していることが多い。



岡崎市森越町 ♀，1980年7月5日，鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 041	トンボ目 サナエトンボ科	岡崎市 準絶滅危惧
キイロサナエ <i>Asiagomphus pryeri</i> (Selys)		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方では、静岡県で絶滅危惧Ⅱ類とされ、愛知県でも準絶滅危惧に選定されている。岡崎市では、1980年に小美町、岡町、須渚町、2000年になって奥殿町で確認されている。生息環境は、丘陵地や低山地の緩やかな砂泥底の流れに限られる。同じような環境に生息するヤマサナエよりはるかに数は少ない。生育環境の多くが人間の生活域と重なることで、河川改修や河川工事による生育環境の変化や生活排水や農薬の使用などで、水質環境が大きく変わってしまうことが心配される。コンクリートの護岸工事、砂泥底の改修などを避け、河川にできるだけ人の手を加えないことが大切で、幼虫の好む底質の保持、水質の維持、水量の確保も望まれる。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	準絶滅危惧

【種の概要】

体長 65mm ほどの大型のサナエトンボである。黄色地に黒のスジがはいる。♂は尾部の上の付属器が下のそれより短く、♀を側面から見ると産卵弁が下方に突き出している。飛翔しているときには、近縁種であるヤマサナエと区別することは難しい。

日本特産種で、関東地方以南の本州、四国、九州に産地があるが、いずれの地方でも産地は局所的である。愛知県では、豊橋市、名古屋市、瀬戸市、犬山市、長久手市などで採集されている。生息地の環境で特徴的なことは、丘陵地や低山地の砂泥底の緩やかな流れが必要であるということ。成熟した♂は、流れの石や岸辺の植物の上に静止し、縄張りをもつ。7月に入って♀を捕まえると産卵弁付近に卵塊を付けていることが多い。



岡崎市岡町 ♀, 1980年7月14日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 042	トンボ目 エゾトンボ科	岡崎市 準絶滅危惧
キイロヤマトンボ <i>Macromia daimoji</i> Okumura		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方では、静岡県で絶滅危惧ⅠA類、三重県では絶滅危惧ⅠB類、愛知県と岐阜県では準絶滅危惧とされている。成虫の記録は、岡崎市では1981年の中町での記録が一番古く、2000年代になって奥殿町でも見出されたが、数は限られている。減少した原因として考えられることは、近縁のコヤマトンボと同じような環境に幼虫は生息するが、本種の方がより川底の環境選択性が狭く、河川の改修や予期せぬ出水などで本種に適した環境が保たれにくいものと推測される。矢作川や乙川、郡界川といった生息河川の水質の保全や幼虫が好む砂泥底の保持をすることが大切である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	準絶滅危惧

【種の概要】

体長 75mm 内外。黒地に黄色の縞模様を持つ大型のトンボで、コヤマトンボに似るが、腹部第3節側面の黄色条が分断されること、第8,9節の黄斑がよく発達していること、♀の翅の付け根がだいたい色を帯びること等で区別できる。

本州、四国、九州に分布するが、特定の河川だけに見られる傾向があるとされている。

愛知県では、豊橋市、蒲郡市、西尾市(旧幡豆町)、豊田市(旧足助町)、名古屋市に記録があるが、たいへん少ない種である。

丘陵地から低山地を流れる河川の中流域に生息し、水質の良い緩やかな流れ、川底が砂地であることが生息の条件である。幼虫は2~3年かけて成虫となる。成虫は6月に多く、未熟なうちは付近の林に生活し、成熟するとたそがれ時を中心に活発に生息流域をパトロール飛行する。



岡崎市中町 ♀, 1981年6月4日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 043	トンボ目 トンボ科	岡崎市 準絶滅危惧
ハッチョウトンボ <i>Nannophya pygmaea</i> Rambur		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、静岡県で絶滅危惧 I B 類とされている。岡崎市では、稲熊町、生平町、岡町、小呂町、桑谷町、秦梨町、藤川町、丸山町、竜泉寺町で採集記録がある。また、岡崎市北部地域からは八ツ木町から見出されている。生息地の環境が丘陵地の浸出水による湿地であることから、こうした環境がゴルフ場をはじめとする土地開発の影響で消滅の危機にさらされていることは否定できない。また、近年の温暖化による乾燥化で生育に適する湿地の減少が見受けられる。したがって、保全をするには生息環境そのものを確保し、浸出水を絶やさないと不可欠である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は 20mm 前後で、日本産のトンボの中では最も小さい。体色は♂では未熟のうちは橙褐色であるが、成熟すると真っ赤になる。♀は腹部が太く、黄色と褐色のまだらの斑紋がある。

国内では、北海道を除く本州、四国、九州に分布する。愛知県内では、三河地方や尾張、名古屋地域に広く採集記録がある。丘陵地から低山地の丈の低い植物が繁茂し、浸出水がある湿地に生息する。また、谷間の休耕田で、停水でなく、絶えず水の供給がある場所にも見出される。岡崎市での観察では、このような場所にはモウセンゴケが生育することが多く、本種の生息の手がかりともなっている。

6月下旬から7月にかけて、成熟した♂は生息地の植物に静止し、縄張りをもつ。交尾は付近の草の上で行われるが短時間で終わる。



岡崎市八ツ木町 ♀, 2005年7月10日, 鈴木栄二 撮影

(執筆 鈴木栄二)

昆虫類 044	カマキリ目 カマキリ科	岡崎市 準絶滅危惧
ヒナカマキリ <i>Amantis nawai</i> (Shiraki)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

本種は主に常緑広葉樹林に生息している。日本産のカマキリ目の中では、最も小型種である。翅が微小なために遠方まで飛翔することができにくいので、環境の変化により分布が限られることになる。地域の開発で影響を受けることがあるので、開発する現場だけでなく隣接する地域の環境に留意が必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は♂12~15mm、♀13~18mmである。体色は褐色であり、全体に暗褐色斑点が認められる。「緑色型」の個体を見いだしたことがない。前脚は太く獲物を捕らえることに適している。翅は極めて小さい。11月くらいまで見いだすことができる。

県内分布では、南方系の種であることから黒潮の影響を受ける渥美半島や知多半島から知られているが記録は少ない。田原市、豊橋市、南知多町での記録がある。内陸部では豊田市での記録があるが、岡崎市での記録がないものの生息の可能性はある。国内では、本州以南の分布となる。

【 関連文献 】

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.
 岡田正哉, 2001. ヒナカマキリ. 昆虫ハンター カマキリのすべて, pp.46-47. トンボ出版, 大阪市.

(執筆 浅岡孝知)

昆虫類 045	バッタ目 コオロギ科	岡崎市 準絶滅危惧
ツツレサセコオロギ <i>Velarifictorus micado</i> (Saussure)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

本種は、草原、耕作地、人家周辺などにきわめて普通に生息していて、人とのかかわりにおいて身近な秋の虫の1種であった。しかし、構造物など人家周辺の環境の変化に伴いその個体数は激減していて、鳴き声を聴くことがまれになっている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は、オスとメスともに16mm位である。体色は淡褐色である。目の間の白線は中央で細くなっている。単眼は逆三角形に並んでいる。10月くらいまで見いだすことができる。朝早く「リーリー」とよく鳴いている。

分布状況では、岡崎市内の各地に記録がある。その他に豊田市、豊橋市などの暖地で広く記録されている。国内では、北海道から本州、四国、九州まで分布している。本州の高地には生息していない。

【 関連文献 】

- 岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.
 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.
 豊橋市, 1999. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書.
 杉坂美典, 1985. 岡崎市の直翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.791-810. 新編岡崎市史編さん委員会.
 日本直翅類学会(編), 2011. バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑. 北海道大学.

(執筆者 浅岡孝知)

昆虫類 046	バッタ目 コオロギ科	岡崎市 準絶滅危惧
ミツカドコオロギ <i>Loxoblemmus doenitzi</i> Stein		

【 選定理由・現在の生息状況 】

本種は、主に明るい草原に生息していて、人家周辺の畑に普通に見られ、身近な秋の虫としてなじみがある。

生息状況では、管理型の農業経営となり、依存する畑地が少なくなったことや気密性の高い住居に変化してきたことが一因となって、個体数が激減している。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は、オスで18mm、メス17mm位である。オスの顔面には上方と側方に黒い突起があり、これがミツカドの和名になったものである。メスはオカメコオロギ類とよく似ている。体色は黒褐色で、頭部後方と前胸に横紋がある。10月くらいまで見いだすことができる。鳴き声は「リッ、リッ」である。

分布状況では、岡崎市内の各地で記録がある。その他に豊田市、豊橋市などの暖地で広く記録されている。国内では、本州、四国、九州に分布している。本州の高地には生息していない。



岡崎市 ♂, 2002年8月31日, 大平仁夫 撮影
(右はエンマコオロギ)

【 関連文献 】

- 岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.
 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.
 豊橋市, 1999. 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書.
 杉坂美典, 1985. 岡崎市の直翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.791-810. 新編岡崎市史編さん委員会.
 日本直翅類学会(編), 2011. バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑. 北海道大学.

(執筆者 浅岡孝知)

昆虫類 047	バッタ目 マツムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
クチキコオロギ <i>Duolandrevus ivani</i> (Gorochov)		

【選定理由・現在の生息状況】

本種は、和名の通り朽木のうろなどに生活をしている。うろは乾燥していない常緑広葉樹林内に生息している。オスメスとも翅が短く飛翔するには困難であることから、生息範囲が限定されることになる。このことから、森の伐採や土地の改変など環境の変化に弱く、個体数の減少が心配される。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は、オス 30～35mm、メス 30～32mm 位である。体色は、暗茶褐色で体に不釣り合いの短い翅を有している。触角はとても長く体長の数倍ある。後脚腿節は特に太い。その外側は淡い茶褐色で内側は淡い色である。日中はうろの中や岩の割れ目などでじっとして過ごしている。幼虫、成虫ともに越冬する。コオロギ科の体型に似ているがマツムシ科である。夜になると低い声で「グリーー」と鳴いている。

分布状況では、渥美半島、知多半島、篠島、豊橋市東部丘陵地などである。西三河では、豊田市で記録があるが、岡崎市では記録されていない。国内では、本州、四国、九州である。小笠原諸島や南西諸島には近似種が生息している。

【関連文献】

- 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- 岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫, (下): 5-20. 愛知県.
- 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.
- 杉坂美典, 1985. 岡崎市の直翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.791-810. 新編岡崎市史編さん委員会.
- 日本直翅類学会(編), 2011. バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑. 北海道大学.

(執筆 浅岡孝知)

昆虫類 048	カメムシ目 セミ科	岡崎市 準絶滅危惧
ハルゼミ <i>Terpnosia vacua</i> (Olivier)		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方の各県では、すべてリスト外である。岡崎市では 1980 年頃までは、5 月初旬から下旬にかけて、市内の北部から北東部を中心に「松ゼミ」といわれるほどマツに依存し、マツ林に広く見られていた。しかし、これ以降はマツノマダラカミキリを介としたマツノザイセンチュウによるアカマツ林の立ち枯れに伴い急速に姿を消している。また、松枯れを防ぐための薬剤散布もその現象に大きく影響している。松くい虫の駆除と称して薬剤の散布をすることは極力避けたい。また、マツ林の維持をするために人手を加えることも必要と考える。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は♂は 30mm 内外、♀は 25mm ほどである。他のセミと同様、♂の腹部は共鳴箱のように大きくなっている。体色は♂では著しく黒色を帯びた個体もある。♀は体が小さく、産卵管が露出し、すぐに区別できる。鳴き声は「ゲーキョ・ゲーキョ」とも「ムゼー・ムゼー」とも聞きなすことができる。マツの小枝に静止することが多く、鳴き声を頼りにしても見つけにくい。規模の比較的大きいマツ林に生息するが、マツ林から外の森や林に移動することは少ない。日本のセミの中では一番早く現われる。

本州、四国、九州に分布する。愛知県では、ほぼ全域で記録されている。しかし、いずれの地域でも減少傾向にあり、各自治体レベルでの絶滅危惧の指定が多い。



岡崎市須淵町 ♂, 2011 年 5 月 20 日, 鈴木栄二 採集

(執筆 鈴木栄二)

昆虫類 049	カメムシ目 アメンボ科	岡崎市 準絶滅危惧
オオアメンボ <i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)		

【選定理由・現在の生息状況】

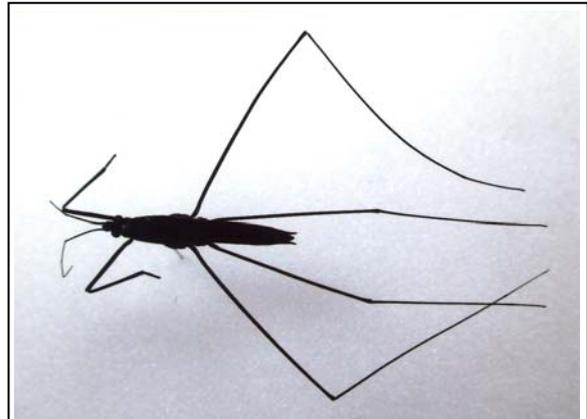
日本産アメンボ類では最大の種で、かつては各地のため池や流れの緩い河川のよどみの水面などにも分布していたが、現在ではため池の減少や水質の汚濁などで、個体数は減少しており、分布は主として額田地域の砂防ダムやため池などに移っている。池金町の北山湿地内の「やながさわ池」には2005年頃までは毎年小数個体が見られたが、最近ではきわめて稀になっている。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は20~27mm内外、黒色~黒褐色で光沢は鈍く、扁平状で細長い船形、水面に浮いて細長い中肢と後肢を動かして移動し、水面に落ちた小昆虫などを捕食している。

不完全変態をして大きくなり、幼虫(仔虫)も水面で生息している。雌は水中の水草に産卵する。成虫は飛翔して移動もするので、ときに河川のワンドなどにも一時的に生息することもある。一般に秋に成虫の個体数が増えるといわれている。



♂ (体長 25mm)
岡崎市千万町町, 2008年8月20日, 大平仁夫 採集

【関連文献】

宮本正一, 1961. 半翅目・アメンボ科. 日本昆虫分類図説(第1集 第3部), 39pp. 北隆館.
吉富博之・長谷川道明, 1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋自然史博研報, (7): 1-10.

(執筆者 大平仁夫)

昆虫類 050	カメムシ目 タイコウチ科	岡崎市 準絶滅危惧
ヒメタイコウチ <i>Nepa hoffmanni</i> Esaki		

【選定理由・現在の生息状況】

近畿地方からの東部への分布の範囲は、静岡県の大井川あたりまで伸びている。愛知県では1967(昭和43)年に西尾市が市指定天然記念物に、1968(昭和43)年には県の指定となり、西尾市では山田ほか(1973)による詳しい生態研究がなされている。岡崎市は主として沖積平野との境界から滲みでる湿地に広く分布していたが、最近では土地整備などで湿地が消滅し個体数は減少している。しかし、市の保護地の北山湿地や小呂湿地では、湿地が保存されているので市内の代表的な生息地になっている。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

成虫の体長は20~24mm。扁平状で小判形、後翅は発達しているが、飛翔はほとんどしないといわれている。卵は湿地の地表部に生まれ、孵化した幼虫は3齢を経て成虫となり、冬期は湿地周辺の陸上の落葉や朽木下などに入って越冬する。本種の生息地はミズゴケなどが生えていて、湧き水の出る湿地に限れているので、湿地と共に水源となる周辺の山林の保全も大切である。



♀ (体長 20mm)
岡崎市池金町北山湿地, 2012年5月, 大平仁夫 採集

【引用文献】

山田万寛ほか, 1973. 西尾市史史料 IV. 西尾市の生物(動物), 511pp. 西尾市.

【関連文献】

伴 幸成ほか, 1989. 日本の昆虫(4). ヒメタイコウチ, 143pp. 文一出版.
長谷川道明ほか, 2005. ヒメタイコウチの分布. 付関連文献目録. 豊橋自然史博物研報, (15): 15-27.

(執筆者 大平仁夫)

昆虫類 051	カメムシ目 タイコウチ科	岡崎市 準絶滅危惧
ミズカマキリ <i>Ranatra chinensis</i> (Mayer)		

【選定理由・現在の生息状況】

かつては水田地帯のため池や周辺の水路などに広く分布していた種であるが、現在では水田の乾田地化やため池の水質の汚濁や外来種のおオクチバスやブルーギルなどの繁殖で生息できる環境がなくなり、絶滅に近い状態にある。しかし、額田地方の谷間の水路やため池にはまだ生息している場所があるので、絶滅を防ぐ方策を考える必要がある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は35~40mmで細長く、尾端には体長と同じくらい長い呼吸管を有し、水中ではこの呼吸管の先を空中に出して呼吸をしている。また、後翅がよく発達しているので、飛翔して他に移動もできる。成虫・幼虫とも捕食性であるが、自ら泳いで捕食することは少なく、水草などに留まって、餌物を待ち受けていることが多い。

本種に類似したやや小形のヒメミズカマキリ (*R. unicolor*) もこの地方に分布しているが、岡崎市からの記録はまだない。



(体長 37mm)

岡崎市淡淵町, 2011年11月22日, 大平仁夫 採集

(執筆者 大平仁夫)

【関連文献】

鈴木栄二, 1985. 岡崎市の半翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.838-852. 新編岡崎市史編さん委員会.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

昆虫類 052	カメムシ目 ナベブタムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ナベブタムシ <i>Aphelocheirus vittatus</i> Matsumura		

【選定理由・現在の生息状況】

河川の清流の砂礫中や河岸の水草の根株などにおいて、ときに小集団で見出され、捕食性である。日中は川底の砂礫中などにも潜んでいるので見つけにくい。しかし、水の汚濁した河川や土の川底や土手がコンクリート化された場所には生息しない。岡崎市では額田地域の清流に分布している河川がある。本種は河川の水質の良さを示す指標種としても重要な存在である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

成虫の体長は8~9mmで円形状、扁平で黄褐色。成虫は板状の短い上翅を有する。成虫は水中で他の小昆虫などを捕食している。また、空気を取り込まなくても、プラストロン呼吸で水中生活ができる。卵は水草の茎に産まれ、幼虫も水中で他の水生の幼虫などを捕食して成長する。本種は鋭い口吻を持っているので、それに刺されると激痛を伴うので注意が必要である。本種は不完全変態をして大きくなるカメムシに近い仲間である。



(体長 10mm)

岡崎市夏山町, 2010年8月28日, 大平仁夫 採集

(執筆者 大平仁夫)

【関連文献】

愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

昆虫類 053	カメムシ目 キンカメムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
アカスジキンカメムシ <i>Poecilocoris lewisi</i> Distant		

【 選定理由・現在の生息状況 】

本種は、色彩が豊かな美麗種であり、成虫が見いだされると記録されてきた経緯がある。実際には、成虫よりも幼虫での確認がほとんどである。その幼虫も最近では見いだす機会が少なくなってきたので危惧している。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は、17～20mm 位である。光沢のある緑色に赤色の筋模様で彩られている。フジ、ミズキなどの広葉樹で実などから吸汁している。春先はほとんどが幼虫であり、落ち葉のある地表を移動している。成虫は11月くらいまで見いだすことができる。また、幼虫で越冬をしている。

脱皮後は鮮やかな体色であるが、徐々に色落ちして死後は全体に黒ずんできるとなる。

分布状況では、豊根村、設楽町、瀬戸市、犬山市、豊田市など県内に広く記録されているが、それぞれ個体数が少ない。西三河より北側に分布していて、岡崎市でも可能性がある。国内では、本州から九州まで分布をしている。



新城市作手善夫, 2004年5月15日, 浅岡孝知 撮影

【 関連文献 】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
鈴木栄二, 1985. 岡崎市の半翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.838-852. 新編岡崎市史編さん委員会.

(執筆者 浅岡孝知)

昆虫類 054	コウチュウ目 オサムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ミカワヤマトオサムシ <i>Carabus yamato ojikai</i> Imura et Mizusawa		

【 選定理由・現在の生息状況 】

ヤマトオサムシ (*Carabus yamato yamato*) の三河地方産亜種 (*C. yamato ojikai*) として記載された個体群である。岡崎市内では三河本宮山から南へ雨山町あたりまで分布が伸びており、雨山町地域の昆虫類の分布相は本宮山系の流れの中に含まれることを示す指標種としても重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は20～25mm 内外、銅色をしたヤマトオサムシより暗色で、体色だけでなく、交尾器の形態が原種とは異っていることが示されている。

成虫は後翅が退化しているため、地上を歩いて移動をしている。幼虫も林床にいて捕食性である。冬期は成虫で土壌中で越冬する。雨山地域はこの亜種の分布の南端にあたり、北部は作手地域から伊那谷あたりまで伸びている。この亜種の分布を通して太古からのこの地域の本宮山との古くからのつながりのある自然を知り、現在の他の昆虫類の分布相を解明する手掛かりになればと思う。また、生息地の山林の環境の保全にも注意したい。



岡崎市雨山町 ♀, 1991年6月14日, 大平仁夫 採集

【 関連文献 】

Imura, Y. & Mizusawa, K., 2002. Lectotype Designation of *Ohomoptera yamato* (Coleoptera, Caradidae), with description of four new subspecies. *Elytra*, Tokyo, 30(2): 365-383.
小鹿 亨, 2008. 豊川市宝地周辺のミカワヤマトオサムシの記録. 三河本宮山昆虫誌: 58-60. 三河昆虫研究会編.

(執筆者 大平仁夫)

昆虫類 055	コウチュウ目 オサムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ヒメマイマイカブリ <i>Damaster blaptoides oxuroides</i> Schaum		

【 選定理由・現在の生息状況 】

マイマイカブリ類は上翅が融合して開かなく、後翅も退化して飛べないので地表を歩いて移動している。そのため生殖隔離で生じたと思われる地域変異が見られ、この地方に分布するものは上記の亜種に分類されている。本種はかつては屋敷の庭や公園や野菜畑などにいるカタツムリ類を捕食する益虫として扱われ、春から初夏には社寺林や道路面などを徘徊する姿がよく見られたが、今ではきわめて希な存在になっている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は 40～50mm で黒色、頭部と胸部は細長く、胸は鈍い青味をおびた光沢を有し、上翅の尾端は細まって短くとがる。本種の細長い頭胸部はカタツムリの殻の中に食い入るのに適しているが、ミミズやナメクジなども捕食するし、ときに樹上に登って蛾の幼虫なども捕食するので、森や庭園や野菜畑などを守る大切な存在であった。冬は朽木の根株中に集まってきて成虫で小集団で越冬する。和名のマイマイカブリは貝類のマイマイに“かぶりつく”という意味。



(執筆者 大平仁夫)

【 関連文献 】

大澤省三ほか, 2002. DNA でたどるオサムシの系統と進化, 264pp. 哲学書房.
大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.

昆虫類 056	コウチュウ目 ガムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ガムシ <i>Hydrophilus acuminatus</i> (Motschulsky)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

かつては水田やため池の水草などが繁茂した池には普通種で、成虫は灯火にもよく飛来していたが、現在では各地のため池は外来種の繁殖や水質の汚濁も重なって生息場所がなくなり、水田地帯のため池などでは絶滅に近い状態にある。また、本種はため池に繁茂していたヒルムシロやフサモなどとそこにいたフナやモロコ類などの在来の淡水魚とも共存していた池の代表的な種であった。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	準絶滅危惧

【 種の概要 】

体長は 30～35mm で黒色で光沢を有し、体は卵形で背面は膨隆して日本産ガムシ類では最大の種である。成虫はヒルムシロ、アサザ、フサモなどを食し、雌は水面に浮かんでいる水草の葉裏に絹糸状のもので作った卵囊の中に産卵、孵化幼虫は水中で 3 齢を経て老熟する。幼虫は捕食性であるが、成虫は水草などを食べている。老熟した個体は水辺の陸地の土壌中で蛹になる。成虫の寿命は 1 年ほどである。



(執筆者 大平仁夫)

【 関連文献 】

細井 操, 1939. ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky の生活史. 植物及動物, 7(11): 43-50.
四方圭一(編), 2004. 伊那谷の田んぼの生き物. 飯田市美術博物館.

昆虫類 057	コウチュウ目 シデムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
クロシデムシ <i>Nicrophorus concolor</i> Kraatz		

【選定理由・現在の生息状況】

分布は北海道から九州の各地と台湾や韓国から中国地方にも及び、岡崎市では主として里山に広く分布していた。シデムシは漢字では「埋葬虫」と書き、そこに生息する小動物や山に捨てられた小家禽類などの死体に集って、その肉を食べ、肉片はだんごにして土中に穴を掘って埋めて産卵、幼虫はその腐肉を食べて成虫になる。別名を「森の掃除屋」とも云われて、森を清潔にする役割をしていた。しかし、今では家畜類は焼却処分にされるし、里山の森の小動物の死体も少なくなり、絶滅に近い状態におかれている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

本種はシデムシ類の中では大形で、体長は雄では30mm内外、雌では40mmほどもあり、体は黒色で光沢を有し、前胸背板は円形状で周辺は扁平、中央部が膨隆し、いかにも喪服をまとった葬儀屋の印象を受ける。往時は死体があると成虫がどこからともなく集ってきて、忙しく動きまわる姿が見られたが、今では森の生きものの死体も少なくなったため、働き場を失って、捕獲用のトラップを設置しても入らなくなっている。



岡崎市大幡町 ♂, 1994年8月, 大平仁夫 採集

(執筆者 大平仁夫)

昆虫類 058	コウチュウ目 クワガタムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ネブトクワガタ <i>Aegus laevicollis subnitidus</i> Waterhouse		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方では、いずれの県も指定リスト外である。岡崎市では、1982年の記録が一番古く、その後の記録はない。今後は、2006年に旧額田町と合併したのちの記録を期待したい。幼虫は朽ちた針葉樹の朽木中に生活する。成虫は樹液や灯火に集まるが、落葉樹の古木の洞に扁平な体を利用して隠れていることが多く、朽木の中で越冬もする。岡崎市の産地である東部の低山地ではゴルフ場が造られ、それに伴う道路工事で成虫が生息する古木が失われた。保全にあたっては針葉樹や樹液の出る落葉樹の混在する林の維持が必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

♂の体長は10mmから20mm。♀は15mm内外。体色は黒色で光沢がある。大あごは細く、2本の内歯がある。第1歯は基部近くにあり大きく、第2歯は大あごの上側にある。鞘翅には縦条があり、点刻もそなえる。小型の個体や♀ではこの点刻が強くなる。

本州、四国、九州に分布するが、東日本には少なく、西日本に多い傾向がある。愛知県では、豊橋市、豊川市(旧一宮町、旧音羽町)、豊田市、名古屋市などで記録されているが、深い山や平野部には分布せず、丘陵地が中心となっている。また、越冬している個体の採集例も多い。

幼虫期にマツやモミの針葉樹や広葉樹の赤枯れした朽木に依存することが知られている。成虫は主に夜間活動するが、日中にも樹皮の裏や洞の中で活動することがある。



岡崎市鶴巣町 ♂, 1982年7月20日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 059	コウチュウ目 クワガタムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
スジクワガタ <i>Dorcus striatipennis striatipennis</i> (Motschulsky)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、いずれの県もリスト外としている。岡崎市では、1982年の記録があり、岡崎市東部から東北部（旧額田町）にかけて広く分布しているが、個体数は減少傾向にある。成虫は低山地の樹液に集まることから、広葉樹の森林の保全が望まれる。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は♂13mm～23mm、♀15mm～21mm。コクワガタと体型が似るが、♂の小型とすべての♀には鞘翅に特徴的なスジがある。大型の♂の大あごは先端に内側を向く小歯があり、中央前に2本の内歯が融合した大きい歯がある。鞘翅は大型のものではつや消し状であるが、小型のものでは光沢がある。成虫は広葉樹の樹皮の隙間や洞に隠れていることが多く、体も扁平になっている。夜間に活動し光に集まる。春に新成虫となり、成虫で越冬する個体もある。

北海道、本州、四国、九州に広く分布している。愛知県内では、北設楽郡豊根村、設楽町、豊橋市、蒲郡市、豊田市（旧稲武町）、西尾市、名古屋市、瀬戸市などで記録されている。比較的標高の高い地域に分布しており、こうした地域では普通種であるが、岡崎市では珍しい種となっている。



岡崎市鶴巣町 ♂, 1982年7月20日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 060	コウチュウ目 ムネアカセンチコガネ科	岡崎市 準絶滅危惧
ムネアカセンチコガネ <i>Bolbocerosoma nigroplagiatum</i> (Waterhouse)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

滋賀県では、希少種というカテゴリーに指定されている。岡崎市では1972年に記録され、「街灯などに稀に飛来するのが見られる程度」という。現在では北部地域で採集されるが少ない。生態があまりよくわかっていないようで、放牧地や芝生等に生息し、幼虫は牛の乾いた糞を食べることが報告されていたり、他のセンチコガネ類と異なり菌を食べるとの報告もあったりする。岡崎市で採集されるものの多くは、燈火に飛来したものである。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長は9mmから14mm。背面は橙色と黒色の2色で斑紋の変異が著しい。北海道、本州、四国、九州に分布するが、北日本のものでは胸が橙色の個体が一般的で、西日本から九州では変異に富んでいるという。

愛知県内では、豊橋市、豊川市（旧一宮町、旧小坂井町）、豊田市（旧稲武町）、名古屋市、小牧市などから記録されているが、いずれの産地でも採集される個体数は多くない。

公園の芝生、ゴルフ場、放牧地に生息し、成虫は地面に穴を掘って地中に潜み、暖かい無風の日没直後に地表近くを飛翔するという。



岡崎市奥殿町 ♂, 2000年10月2日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 061	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ゴホンダイコクコガネ <i>Copris acutidens</i> Motschulsky		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方で本種の生息を危惧している県はない。本宮山を中心に分布が確認されており、岡崎市では石原町で採集されている。新鮮なニホンジカの糞に集まることが多く、40年ほど前にはあまり見られなかったが、近年では野生のニホンジカの増加に伴い、どちらかという増加の傾向にある。しかし、一旦依存しているニホンジカの減少が始まれば、数を減らすことが予想される。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は15mm前後で、光沢の強い黒色をしている。♂は頭部に角を1本そなえ、前胸背板には4本の角状の突起がある。♀は頭部に♂に比べるとはるかに小さな突起があり、前胸背板の突起も小さいものの4つの突起がある。また、前翅には弱い縦溝がある。

愛知県内では、三河地方の本宮山を中心とした地域に採集記録が多い。豊川市(旧音羽町、旧一宮町)、新城市(旧作手村)、岡崎市(旧額田町)等が代表的な生息域となっている。

5月から姿をあらわし、新鮮なシカの糞に集まることが多い。ウシの糞のトラップで多くの個体を得たことがある。夜行性のようで、しばしばライトトラップにも誘引される。



岡崎市蓬生町 ♂, 2009年5月9日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 062	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ツノコガネ <i>Liatongus phanaeoides</i> (Westwood)		

【選定理由・現在の生息状況】

滋賀県では、情報が不足しているが注目することが必要な「要注目種」として選定されている。東海地方では、すべての県でリスト外とされている。岡崎市では、本宮山でニホンジカの糞から2008年に見出された。しかし、生息密度が低く、たいへん稀少な種である。本宮山を中心とした野生のシカの増加が本種の生息を支えている。また、生活史の大部分が山地の獣糞や放牧地のウシやウマの糞に依存することから、野生の獣が生息できる自然環境の保全が期待される。また、放牧地の飼料の中に薬剤の混入を避け、糞の自然度を上げることが必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長10mm内外。体色は光沢のない黒色で、♂は頭部から長く湾曲し、前胸背板の後部に達する長い角があり、名前の由来ともなっている。

北海道から九州まで広く分布している。愛知県では本宮山や豊田市(旧稲武町)で1973年、1974年に採集されている。これらは高原の牧場からの採集例で7月から8月に個体数を増すという。

山地の獣糞や放牧地のウシやウマの糞に集まり、比較的古いものにもいる。生息地では、糞の下に坑道を掘り、地上から糞の小片を少しずつ運び込み、多層的に詰め込んで楕円形の育児球をつくり、その上部の卵室に産卵する。成虫は保育をしないという。



岡崎市石原町 ♂, 2008年7月6日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 063	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
マルツヤマグソコガネ <i>Aphodius (Sinodipterna) troitzkyi</i> Jacobson		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、三重県で準絶滅危惧とされ、滋賀県では情報が不足しているが注目に値する「要注目種」として選定されている。岡崎市では、本宮山でニホンジカの糞から2008年に見出された。これは、本宮山を中心としたニホンジカの増加が本種の生息を支えていると推測される。したがって、ニホンジカの育つ自然林の保全が大切である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長5mm内外。黒色で強い光沢があり、背面は強く盛り上がる。頭部の前縁は弓状に湾入し、両側は上に反りかえる。小楯板は長く、上翅の3分の1ほどである。

国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。局地的に分布するようで、いずれの産地でも数は多くない。愛知県内での記録は、本宮山付近に集中しているが、稀な種である。成虫は、春、秋に現われる。やや時間の経過した球形のシカ糞中に潜り込み、1卵ずつ産卵することが多く、蛹化は土中で行われるという。

三重県では、ニホンジカの増加と本種の増加は相関がないという。しかし、餌となる糞の供給がなされないことには、本種の生息は考えられない。



岡崎市石原町，2008年7月6日，鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 064	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
オオフタホシマグソコガネ <i>Aphodius (Aphodius) elegans</i> Allibert		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、三重県で絶滅危惧Ⅱ類に、静岡県では要注目種とされている。愛知県ではリスト外である。岡崎市では、大幡町の記録が一番古く、その後、本宿町で1973年に、続いて1978年に羽栗町で得られているが、いずれも飛翔中の個体が採集されたものである。その後の岡崎市での記録はない。

本種の減少要因としては、放牧地の減少や農耕に使用するウシやウマの飼育放棄による牧草地の減少が考えられる。また、ウシやウマに投与される駆虫剤は糞に薬剤が残留し、食糞性の甲虫の幼虫に成長を抑制するため、糞に依存する本種の生息に影響している。放牧地にある農薬の影響のない新鮮な糞はこれらの種の保全には欠かせないものとなっている。本種のような動物の糞を食べて生育する食糞群の甲虫は、その生活史の多くを糞に依存している特殊な種群である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長11~13mm。マグソコガネの仲間では大型種である。体色は光沢のある黒色で、鞘翅は黄色で中央後方に二つの大きな黒紋がある。体はおおむね長円形で頭部は大きく、♂は前方に角があり、前胸背板の中央前方がくぼむ。♀は頭部の前方が少しふくらむだけである。

北海道、本州、四国、九州に分布する。愛知県では、岡崎市の他に豊田市、瀬戸市、春日井市等で1980年までは確実に記録されている。山地から丘陵地の放牧地に姿を見せ、採集される個体は春と秋に多く、成虫・幼虫共に牛糞等に集まり糞を食べる。地中に小さな育児球を埋め、その中に産卵する。蛹化は土中で行われる。

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 065	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ヒゲコガネ <i>Polyphylla laticollis</i> Lewis		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方では、静岡県において情報不足（DD）の扱いであるが、近年減少傾向にあるという。岡崎市においては、矢作川流域の八帖南町、中岡崎市、東大友町で採集されている。発生期には付近の駅舎の照明に誘引されるほど個体数の多い年もあるが、近年は姿を見ない年もある。減少の原因としては、河川敷の環境の悪化がある。種の保全を図るには、発生地が主に矢作川や乙川の河川敷であることから、こうした場所の人工施設への転換を極力抑えたり、河川敷の植生の維持をしたりすることが大切である。

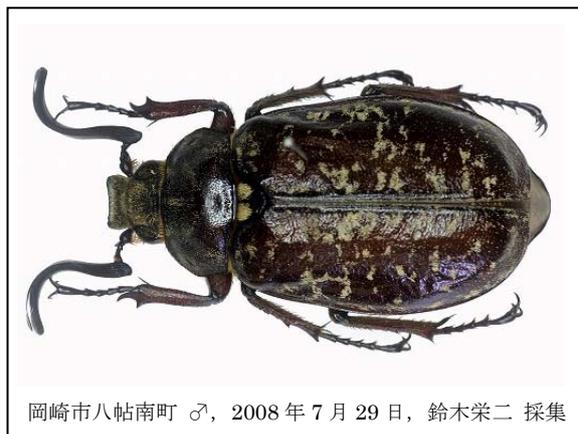
県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長 35mm 内外。体の輪郭はほぼ長円形、鞘翅は茶褐色で不規則な多数の白斑が点在する。♂の触角は著しく長く、頭部と前胸部の長さにはほぼ等しい。

本州、四国、九州に広く分布している。愛知県では、豊橋市、豊川市（旧一宮町）、西尾市、犬山市、春日井市、瀬戸市、一宮市（旧尾西市）、知多市など大きな河川のある平地や海岸付近で記録されている。

幼虫は主に海岸や河川の砂質地の土中に生息し、植物の根を食べて成長する。成虫は 7 月から 8 月頃に現われ、灯火に飛来する。成虫をつかまえると「シュツ シュツ シュツ」と体を縮めることで発音する。



岡崎市八帖南町 ♂, 2008 年 7 月 29 日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 066	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ヤマトアオドウガネ <i>Anomala japonica</i> Arrow		

【選定理由・現在の生息状況】

東海地方では、愛知県では準絶滅危惧の指定を受けている。岡崎市では、1981 年に秦梨町で採集されている。しかし、その後は記録がなく、絶滅が心配されている。海浜性の強い種で、岡崎市のような海岸から離れた地域に生息することは珍しい。全国的に見ても近縁種のアオドウガネの分布の拡大で、以前より個体数が減少している。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は 25mm 内外。アオドウガネに似るが体型が細く、鞘翅の側縁の隆起が後半 2/3 ほどで消失すること、鞘翅の青い色彩に深みがないこと、また頭部が小さい印象があることで区別できる。

本州、四国、九州に分布し、成虫は 6 月から 9 月頃まで見られる。灯火に集まる性質が強く、ほとんどがライトトラップによる採集である。

愛知県では、豊橋市、豊川市（旧御津町）、田原市（旧田原町、旧渥美町）、知多市などから記録されている。いずれの産地も海岸や海岸に近い地域から知られており、内陸の丘陵地や低山地には分布していない。岡崎市での記録が 1981 年以来、見られないことから生息が心配される。



田原市伊良湖町, 2007 年 6 月 4 日, 鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 067	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
アカマダラハナムグリ <i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、三重県と愛知県では準絶滅危惧とされている。三重県では生息地が限られ、個体数も少ない。また、近年の減少が著しいと報告されている。岡崎市では、近年の記録がなかったが、2013年になって森田千博氏が岡崎市美合町でクヌギの樹液に飛来した個体を採集した。保全をする上での留意点として、幼虫はハチクマなどの猛禽類の巣に依存しているとの報告もあり、猛禽類の生息する森や林の保持や成虫が訪れるクヌギやコナラなど樹液の出る雑木林の維持管理が必要と思われる。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	情報不足

【 種の概要 】

体長 18mm 前後。体色は赤褐色でロウ状の光沢があり、全体に多数の黒い小紋がある。近似種はなく同定は容易である。

日本全土に分布し、愛知県内では、豊川市（旧音羽町）、蒲郡市、豊橋市、名古屋市からの報告がある。いずれの採集例も 1980 年前後に集中している。

成虫はクヌギやコナラなどの樹液に集まる。新成虫は晩夏から初秋にかけて発生し、そのまま越冬するといわれている。岡崎市の飼育下個体の観察では、10 月下旬にはおが屑のマット中で越冬の準備に入っていた。幼虫は猛禽類の巣の中から蛹とともに発見されたといわれている。また、他のハナムグリ類の飼育と同じように飼育できるという報告もあり、謎の多いコガネムシである。



岡崎市美合町，2013 年 8 月 31 日，森田千博 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 068	コウチュウ目 コガネムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
クロカナブン <i>Rhomborrhina polita</i> Waterhouse		

【 選定理由・現在の生息状況 】

東海地方では、愛知県が準絶滅危惧に指定している。東海地方ではないが、滋賀県では要注目種としている。岡崎市では、上衣文町、本宿町、丸山町などで採集されている。いずれの産地でも個体数は少なく、絶滅が心配される。昭和 40 年代以降は丘陵地や低山地が開発され、本種の生息環境も大きく変化している。幼虫の生育は大木に依存していると言われており、成虫についても各種の広葉樹の樹液や熟した果実に集まることから、広葉樹を主体とした里地や里山の保全が必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【 種の概要 】

体長 30mm 内外。光沢のある漆黒色で♂の前脛節の外歯は痕跡程度で♀のそれは明瞭である。また、♂の触角は長く、腹部の中央が凹んでいる。

北海道、本州、四国、九州に分布する。愛知県内では、豊橋市、蒲郡市、新城市、設楽町、豊川市（旧御津町、旧音羽町、旧一宮町）など三河地域からの記録はあるが、尾張地域や名古屋地域では少ないようである。

成虫はカナブンや近縁のアオカナブンより遅く出現し、広葉樹の樹液に集まる。これら 2 種との区別は、鞘翅の色彩から区別は容易である。幼虫の生育場所はよくわからないが、大木の樹洞内から蛹室が見つかったという。



岡崎市上衣文町 ♂，1976 年 8 月 3 日，鈴木栄二 採集

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 069	コウチュウ目 コメツキムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ジュウジミズギワコメツキ <i>Fleutiauxellus cruciatus</i> (Candèze)		

【選定理由・現在の生息状況】

主に大きな河川の下流域の河原の砂礫中に分布する種で、愛知県では豊川と矢作川の下流域の河川敷に分布している。生息場所は、乾燥した砂礫のある河川敷の砂礫中に雌雄が小集団で生息、幼虫もそこで見出される。成虫・幼虫共に捕食性であるが、成虫は周辺の柳類に発生するアブラムシ類の甘露にも集まる。

最近では、河川敷の整備が各地で行われていて、砂礫からなるきれいな河川敷が消滅しているし、分布が限られている種であるので、絶滅する危険がある。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は4~5mm内外で黒色、上翅に通常4個の赤橙色の斑紋を有するが、雄では明瞭に現れないものもある。成虫は5月から6月頃に現れるが、7月頃にはもう見られなくなる。幼虫は砂礫中に生息し、捕食性である。類似した小形で黒色をしたミズギワコメツキ (*F. curatus*) や上翅に同じような黄橙色紋を有するヨツボシミズギワコメツキ (*F. yotsuboshi*) とともに場所によっては混生しているが、本種は個体数も少なく、分布も限定されている。



♀ (体長 4.5mm)
豊橋市加茂町, 2005年6月14日, 大平仁夫 採集

(執筆 大平仁夫)

【関連文献】

大平仁夫, 1998. 豊川河川敷に生息するミズギワコメツキ類 (コメツキムシ科). 鳳来寺山自然科学博物館館報, (27): 1-4.
岩月 学, 2007. 矢作川流域のジュウジミズギワコメツキの生存記録. 三河の昆虫, (54): 650-651.

昆虫類 070	コウチュウ目 ホタル科	岡崎市 準絶滅危惧
ヒメボタル <i>Luciola parvula</i> Kiesenwetter		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市ではゲンジボタルはよく知られているが、本種は幼虫が陸生で生態も異なり、生息地は集落周辺の竹藪や河川土手などであるが、最近では環境整備が進んでいて本種の生息する場所が減少している。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

成虫は体長6~8mmで雌は5~6mm。体は黒色で前胸背板上の黒斑は、右図のように前縁に半円状に生じる。また、雌は小形で後翅が退化しているため飛べない。

幼虫は地上の落葉中に生息しているオカチョウジガイなどの巻貝やミミズやダンゴムシなどを捕食しており、1年で成虫になる。発光は雌雄ともするが、やや青白い光で点滅のリズムはヘイケボタルよりテンポが早い。成虫の活動は夜半になってからなので、通常ではこのホタルの発光を観察することは少ない。かつて古い墓地で夜半に光る青白い点滅する光の「人魂」の主は本種の発光とも云われている。



♂ (体長 8mm)
岡崎市八ツ木町, 2002年5月10日, 大平仁夫 撮影

(執筆 大平仁夫)

【関連文献】

神田左京, 1981. ホタル(復刻版), 496pp. サイエンス社.
大場信義, 2004. ホタルの点滅の不思議・地球の奇跡, 199pp. 横須賀自然・人文博物館.

昆虫類 071	コウチュウ目 ホタル科	岡崎市 準絶滅危惧
ヘイケボタル <i>Luciola lateralis</i> Motschulsky		

【選定理由・現在の生息状況】

水田地帯に分布、ゲンジボタルより小形で発光のリズムも異なる。知名度はゲンジボタルより低い、古くから水田と密接に関係してきた種である。しかし、現在は水田が乾田化され、沼や水路なども整備され、生息できる環境が減少している。やがて見られなくなる心配があるので、人為的な増殖と保全が強く望まれる。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長は8mm内外、前胸背板の正中には幅広い黒色の縦斑を有するのでゲンジボタルとは識別できる。幼虫は水田や沼などに生息するタニシの仔貝やモノアラガイなどを捕食している。老熟した幼虫は5月から6月にかけて陸の土中で蛹になり、成虫は8月頃まで見られるが、ゲンジボタルより早いリズムで点滅し、より忙しく飛翔する。本種は岡崎で発生しているホタル類では、古くから農家の人の暮らしと共にしてきた種であるし、ホタルの発生で季節の移りかわりを知って、農作業を進めてきた種でもある。



♀ (体長 10mm)
岡崎市八ツ木町, 2004年6月10日, 大平仁夫 撮影

(執筆者 大平仁夫)

昆虫類 072	コウチュウ目 ジョウカイボン科	岡崎市 準絶滅危惧
カタキンイロジョウカイ <i>Themus ohkawai</i> M.Sato		

【選定理由・現在の生息状況】

日本産ジョウカイ類の中では大形種で山地性。岡崎市では「北山湿地」や「おかざき自然体験の森」の里山林にも分布するが、個体数は額田地域の本宮山系の山林帯に多い。成虫は広葉雑木の山林に分布していて、針葉樹林には分布しない。本種の分布は雑木林の昆虫類の生態系の状態を知る指標種としても重要な存在である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

成虫は体長20mm内外、上翅は黄褐色で鈍い金属光沢を有し、翅底は緑銅色の金属光沢をした目立つ黒斑を有する。また、頭部は黒色で、前胸背板の正中は幅広く黒色を呈し、触角は黄褐色で、肢の腿節は黒色。幼虫は林床の落ち葉中を活発に動いて捕食性である。成虫は雑木林の葉や花上にいて、そこを訪れる昆虫類を待ち受けて捕食している。成虫は動きや性格が粗野であることから、和名は往時の悪僧の「浄海坊」からきた名がつけられている気の毒な昆虫でもある。



♀ (体長 19mm)
岡崎市八ツ木町, 2012年6月10日, 大平仁夫 採集

(執筆者 大平仁夫)

【関連文献】

Sato M., 1976. New Cantharoidea from Japan (Col.).
Trans. Shikoku ent. Soc., 13 (1-2): 51-60.
佐藤正孝, 1985. ジョウカイボン科. 原色日本甲虫図鑑(III), pp.107-118. 保育社, 大阪.

昆虫類 073	コウチュウ目 テントウムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
カメノコテントウ <i>Aiolocaria hexaspilota</i> (Hope)		

【選定理由・現在の生息状況】

大形で目立つ種である。愛知県では山地を中心に広く分布していて、海岸部や島嶼ではみられない。多くは渓谷や河川のオニグルミが生育する場所に生息しているが、矢作川などの大河川では下流域まで分布しているのは興味深い。これまでに県内からは、犬山市、春日井市、愛西市、豊田市、岡崎市、安城市、豊根村、設楽町、新城市、豊橋市から記録されているが、岡崎市においては本宮山からの記録がある。本種と関わりを持つオニグルミは、市内を流れる矢作川や大平川などの河川に生育しているが、近年、開発や河川改修による自然環境の変化により、多少なりとも影響を及ぼしかねない。豊かな河畔林が持つ生態系の重要性に対する配慮が必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長 11~13mm。黒色で体に光沢があり上翅には赤色の亀甲紋があり、類似する種はなく多種との区別は容易である。捕食性テントウムシで、分布は北海道・本州・四国・九州；千島・朝鮮半島・樺太・シベリア東部に分布する寒地系の種である。

食餌は大野正男（1968）によるとハムシ、ワタムシ、キジラミ、アブラムシなどを捕食するが、もっとも普通の獲物はクルミハムシの卵と幼虫であるとされている。従って、本種の生息環境はこのような条件のある場所にみられる。成虫は5月末ごろオニグルミの葉裏に産卵し、幼虫は2週間ほどして葉裏で蛹化する。



岡崎市石原町闇苅溪谷，
1998年6月27日，山崎隆弘 採集

【引用文献】

大野正男，1968. テントウムシ科 3 種の食性. 日本応用動物昆虫学会誌, 12 (2): 99-100.

(執筆者 山崎隆弘)

昆虫類 074	コウチュウ目 テントウムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ハラグロオオテントウ <i>Callicaria superba</i> (Mulsant)		

【選定理由・現在の生息状況】

愛知県では山地帯に広く分布がみられるが、平野部でも河川敷にいたることがしばしばある。本県からは犬山市、瀬戸市、豊根村、東栄町、新城市、豊川市、豊田市、安城市、岡崎市と広範囲わたる地域から記録されている。本市においては矢作川、鶴巣町などわずかな採集例しかない。クワの大木が減ったこともひとつの要因かも知れないが、もともと多産する種ではない。現在、本市に分布する甲虫類では珍しい種のひとつとなっているが、即座に消滅するような状況には至っていない。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長 11~12mm の大型のテントウムシで、本州・四国・九州；台湾・中国・チベット・ヒマラヤ・インドに分布する。背面は黄赤から黄褐色で、前胸背には1対と上翅に各7個の黒紋を配し、1-3-3に並ぶ。腹面は黒色であるが、腹節の周縁は黄褐色である。幼虫・成虫ともキジラミ類やアブラムシ類を捕食することが知られている。春季クワの成木から見出されることがよくある。

最近ではこのような環境下の豊田市の中山地ではよく得られている。



豊川市御津町，1985年5月12日，山崎隆弘 採集

【関連文献】

大平仁夫，1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.
村田文彦，1981. 岡崎市でハラグロオオテントウを採集. 三河の昆虫, (28): 121.
大塚 篤，2013. 愛知県におけるハラグロオオテントウの分布と生態. 月刊むし, (504): 17-21.

(執筆者 山崎隆弘)

昆虫類 075	コウチュウ目 カミキリムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ヒラヤマコブハナカミキリ <i>Enoploderes bicolor</i> Ohbayashi		

【選定理由・現在の生息状況】

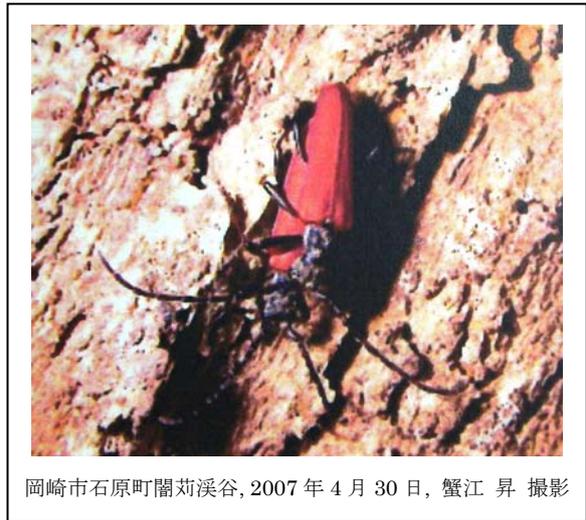
愛知県からは東栄町・旧鳳来町御岳山・旧富山村・岡崎市本宮山・豊川市本宮山・豊橋市雲谷町などから記録があるが希な種とされている。そのなかにあつて、本宮山系は本種の生息地として良好であることから、きわめて貴重な存在と言え、本市のいつまでも残したい種のひとつとして挙げられよう。本種を含め貴重種の保全については、現在の自然環境を維持することがきわめて重要であり、大きな変化を加えないことが最善の保護策といえよう。蟹江昇氏は本宮山において本種の調査を行い、その結果を「三河本宮山昆虫誌」に記録している。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長 11~12.5mm。本州・四国・九州に分布する暖地系の種で、上翅は美しい朱赤色しており前胸背は両側が円錐状に尖っている。成虫はカエデの花を好んで集まることが知られていて、出現は4~6月頃である。

従来から希少なハナカミキリとされてきたが、最近樹洞のできやすいアカメガシワの大径木に潜んでいることが分かってきた。このことで、発見がしやすくなっている。



岡崎市石原町關苅溪谷, 2007年4月30日, 蟹江 昇 撮影

【関連文献】

- 蟹江 昇, 2008. 初夏の甲虫. 三河本宮山昆虫誌: 94-95. 三河昆虫研究会編.
- 西川 誠, 1986. 額田郡本宮山でヒラヤマコブハナカミキリを採集. 三河の昆虫 (33): 218.
- 湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上), pp.389-433.

(執筆者 山崎隆弘)

昆虫類 076	コウチュウ目 カミキリムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
トラフカミキリ <i>Xylotrechus chinensis</i> (Chevrolat)		

【選定理由・現在の生息状況】

愛知県からは春日井市、小牧市、一宮市、知多市、豊根村、岡崎市、豊橋市、蒲郡市で記録があるが産地は多くない。岡崎市からは岡町 (15-IX-1979)、茅原沢 (28-VII-1979) の古い記録があるにすぎない。その後においてはまったく採集例がなく現在に至っている。生糸産業の盛んな時代にはクワ畑などいたる所で見られたが、養蚕の衰退とともにクワが栽培されなくなり、当時普通にいた本種も時代と共に姿を消していった。最近では市内から見出すことはきわめて困難な状況といえよう。しかし、まだどこかに生き残っている可能性も十分に考えられるので、再調査をする必要がある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長 15~25mm。日本全土と朝鮮半島・中国・台湾に分布する。出現は7~8月。別名体の紋様からトラカミキリとも呼ばれている。成虫は5~8月ごろに現れる。紋様はアシナガバチにも似ているため、時にスズメバチに間違えることもある。成虫・幼虫ともクワの害虫として駆除の対象として嫌われた時代もあった。



蒲郡市, 1966年7月10日, 山崎隆弘 採集

【関連文献】

- 大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.
- 湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫 (上), pp.389-433.

昆虫類 077	コウチュウ目 カミキリムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
セダカコブヤハズカミキリ <i>Parechthistatus gibber shibatai</i> (Miyake)		

【選定理由・現在の生息状況】

奥三河山岳のブナ林では現在でも若干得られているが、愛知県では少ない種である。これまでに、面ノ木峠、井山、猿投山、段戸裏谷、旧富山村、茶臼山、東栄町、鳳来寺山および、岡崎市の本宮山から記録がある。当地は本県においては最南の記録地になるが、最初に記録されたのが1978年である。それ以降、本種は姿を消したかと思われていたが、2012年の初夏になって、本宮山山頂部の粗朶をビーティング採集したところ偶然に落下した。これによっても当地が確実な生息地のひとつである。まだ個体密度は不明の状態ではあるが、本県の分布上における貴重な存在である。周辺地域の自然環境の保全と共に、ぜひ残しておきたい種である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

体長 16~24mm。成虫の体は黒色で、全体が褐色の微毛でおおわれている。上翅の前面には大小の果粒状のこぶがあり、翅端は外縁角が伸びてトゲ状にとがっている。

成虫は5~10月ごろ出現し、主に倒木や伐採木に集まる。幼虫はブナ、ミズナラ、クリ、ウワミズザクラなどを食べることが知られている。この仲間で本県に分布しているのは本種のみである。



岡崎市石原町本宮山山頂部,
2012年6月27日, 山崎隆弘 採集

【関連文献】

山崎隆弘, 1978. 三河地方で採集した珍しい甲虫(3). 三河の昆虫, (21): 81-83.
湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫(上), pp.389-433.

(執筆者 山崎隆弘)

昆虫類 078	コウチュウ目 ハムシ科	岡崎市 準絶滅危惧
ルイスジンガサハムシ <i>Thlaspidia lewisii</i> (Baly)		

【選定理由・現在の生息状況】

愛知県では奥三河山岳を中心に東部の山地に分布しているが、本種は三河地方の豊田市の山地、豊根村、設楽町、新城市、豊川市、豊橋市、岡崎市であるが、長野県から続く本県の山岳地をへて、本宮山一帯まで続いていて、分布域はこの辺りで途切れてしまう。したがって、当地は分布上貴重な生息地として興味深い。一方これとは別に本県にはもうひとつの分布の流れが、静岡県との県境に位置する弓張山地(蛇紋岩からなる低山地帯)での分布状況とはかなり異なっていて、ここでは渥美半島に近い弓張山地の南端まで分布している。奥三河から続く山脈の南端近くに位置する本宮山(山崎, 1989; 山崎, 2008)は本市の確実な生息地となっているが、最近では減少傾向にあり生息数も極めて脆弱で希に採集される程度になってきた。寒地系の種であるので、温暖化傾向にある最近の気象や、人為的改変がもたらす影響がわずかであっても、生存には何らかのダメージを与えることもあり得る。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

北海道・本州・四国・九州・対馬; 朝鮮半島、シベリア東部、中国に分布する寒地系の種である。体長は5.2~6.8mmで暗褐色をしている。食草はコバノトネリコ、イボタが知られている。大野正男(1956)によると、越冬した成虫が5月の初め頃褐色の卵囊につつまれて食草の葉裏へ生みつける。幼虫は5月中旬から7月中旬にかけて見られるとある。本種の幼虫は脱皮ガラを又状の突起に糞を付けて装う。成熟した5齢幼虫は葉裏で蛹化し、成虫は夏に出現する。

【引用文献】

大野正男, 1956. 日本産 *Thlaspidia* 属について. 東洋大学紀要, 9: 138-132+3pls.
山崎隆弘, 1989. 三河本宮山のハムシ. 三河の昆虫, (36): 248-255.
山崎隆弘, 2008. 三河本宮山昆虫誌, 108pp. 三河昆虫研究会.



岡崎市石原町本宮山,
1978年6月1日, 山崎隆弘 採集

(執筆者 山崎隆弘)

昆虫類 079	トビケラ目 コエグリトビケラ科	岡崎市 準絶滅危惧
イワコエグリトビケラ <i>Manophylax futabae</i> Nishimoto		

【 選定理由・現在の生息状況 】

トビケラ類は、幼虫が水生で、一般に河川の水中の岩石面に筒状の巣を作って生活、成虫になって翅が生えて陸上生活をするが、このイワコエグリトビケラ属の幼虫は陸上かそれに近い生活をしている。上記の種は本宮山の闇苧溪谷に分布しており、この溪谷では個体数も比較的多い。ここからは 1991 年 8 月 18 日に幼虫が、1994 年 5 月 1 日に飼育成虫が得られている。闇苧溪谷は岩石が多く、本種の県内での代表的な産地になっているし、他の水生トビケラ類の貴重な生息溪流になっているので、その代表的な貴重種をここに選定することにした。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【 種の概要 】

成虫の前翅は 7mm 内外で斑紋は生じなく黒褐色、成虫は 5 月頃に現れる。幼虫は陸上のやや湿った垂直状の岩盤に細かい石片で作った筒状の巣を作り、その中で生息している。老熟幼虫の巣の長さは 10mm 内外、入り口を岩に貼り付けてミノムシのように垂れ下がっている。しかし、陸に幼虫の巣が見られても乾燥した岩盤には生息しなく、適当な湿気のある場所が必要で、水生昆虫として扱われている。



幼虫の巣，岡崎市石原町 闇苧溪谷，2013 年 9 月 22 日，西本浩之 採集

(執筆者 大平仁夫)

【 関連文献 】

Nishimoto, H., 1997. Discovery of the genus *Manophylax* (Trichoptera, Apataniidae) from Japan with descriptions of two new species. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 3 (1): 1-14.
 愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編-, 651pp.愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

昆虫類 080	チョウ目 アゲハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
ギフチョウ <i>Luehdorfia japonica</i> Leech		

【 選定理由・現在の生息状況 】

岡崎市では、1960 年代には、明大寺町の丘陵地にも生息していたが、宅地化によって 1968 年には姿を消した。1970 年代から 1980 年代では、保母町、池金町では多産し、須渚町、茅原沢町、生平町、藤川町、大幡町にも生息していた。1990 年代には、蔵次町でも発生地が見つかった。しかし、2000 年頃から保母町、池金町、蔵次町では、乱獲や里山に人手が入らないことによる環境の変化によって激減するようになり、須渚町では発生地の表土が流出したため姿を消した。その他の発生地からも、宅地化などによって環境が変化し姿を消した。そこで、池金町の北山湿地では、本種の保護活動が盛んになった。2010 年、岡崎市に生息する本種は、岡崎市自然環境保全条例に基づく「指定希少野生動植物種」の指定を受け、全面的に採集禁止となった。現在では、保母町、池金町では順調に回復し、安定した数の個体が発生している。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

保全にあたっては、食草のヒメカンアオイが生育できる環境を保っていくことが重要である。

【 種の概要 】

日本の固有種で、本州のみに分布している。愛知県では、尾張地方や三河部に分布しているが、東三河では絶滅した。

年 1 回の発生で春の女神と呼ばれている。成虫は、暖冬の年では 3 月下旬から、通常は 4 月上旬から発生し、4 月下旬まで見られる。4 月 10 日頃が発生のピークになることが多い。卵は、食草のヒメカンアオイの裏面に 10 卵程が産み付けられ、1 週間ほどで孵化する。幼虫は、約 1 ヶ月後、蛹となり、そのまま夏～冬を越し、翌春、羽化する。

狭い生息地域内で世代を繰り返しているため、その地域内の独特な斑紋を持つようになった個体群が多く、岡崎市産も独特の斑紋を持つ。



岡崎市池金町，2004 年 4 月 11 日，伊藤啓司 撮影

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 081	チョウ目 アゲハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
ウスバシロチョウ <i>Parnassius citrinarius</i> Motschulsky		

【 選定理由・現在の生息状況 】

岡崎市では、市の東部に位置する東河原町、大代町、中金町、石原町、宮崎町、片寄町、千万町に分布し、愛知県の分布の南限に当たる。発生地ではかなりの数の個体数を見ることができ、茶畑周辺に生えるムラサキケマンを食草としているため、人からの影響を受けやすい。また、弱々しく飛ぶ習性があり、容易に採集できるため乱獲される危険性も高い。以前は数十頭が毎年発生していた茶畑が、何らかの理由で放置され、荒地化した結果、本種が姿を消した場所もある。

発生地には、適当に人手が入って環境を保全する必要があるが、農薬の空中散布等、自然環境を大きく変化させることがないようにする必要がある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

シロチョウという和名がついているが、アゲハチョウ科のチョウである。北方系のチョウで、本州には近似種はいない。中部山岳地帯には発生地が多い。愛知県では、東北部の山地に局部的に分布する。

細かく羽ばたきながら、ゆっくり滑空するような独特の飛び方をする。5月の新緑の中では、飛んでいる姿がよく目立つチョウである。翅を開いて止まることも多い。

年1回の発生で、成虫は、4月下旬から5月上旬に発生し、5月中旬まで見られる。卵は、食草ではなく、その周辺にある小枝などに適当に産み付けられる。卵で越冬し、2月になると孵化する。4月上旬には枯れ葉を糸でつないで繭を作り、その中で蛹になるという、チョウとしては珍しい習性を持っている。



岡崎市東河原町，2011年5月4日，杉坂美典 撮影

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 082	チョウ目 シジミチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
ミドリシジミ <i>Neozephyrus japonicus</i> (Murray)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

岡崎市では、1968年までは、大幡町の湿地に多産していたが、1969年に湿地が埋め立てられ、その周辺にわずかに生息するだけとなった。

1970年までは池金町の北山湿地や本宿町、上衣文町、保母町にも生息していたが、その後、姿を消した。現在では、八ツ木町、竜泉寺町、大幡町、小呂町に生息している。八ツ木町の自然体験の森では多産するが、以前は見られなかった。現在、発生しているのは、森を整備する際に移植したハンノキに本種の卵がついていて、その後、発生を繰り返しているものと思われる。

保全にあたっては、湿地の周辺に生えるハンノキを食樹としているため、湿地を保全することが重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

愛知県では、丘陵地から山地にかけて発生地が点在する。湿地の周辺に生息するため局部的に分布し、湿地の減少に伴い、減少傾向にある。

年1回の発生で、6月上旬から7月上旬にかけて見られる。

雄は、緑青色に輝く翅表をしている。雌は、黒褐色の地色に赤い紋が現れるA型、青い紋が現れるB型、赤と青の両方の紋が現れるAB型、そしてどちらの紋も現さないO型の4つの型がある。

岡崎市産では、B型とO型が多く、まれにAB型が現れる。A型はほとんど出現しない。O型で白斑が現れる個体も出現する。

卵は、ハンノキの根際に近いところに、数卵から数十卵をまとめて産みつけられ、そのまま冬を越し、3月の新芽が膨らみ始めた頃に孵化する。その後、新芽に潜り込んで食べ、若葉が育つようになると葉を紡いで巣を作って成長し、5月に蛹化する。



岡崎市八ツ木町，2008年6月6日，三浦重光 撮影

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 083	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
ウラギンスジヒョウモン <i>Argyronome laodice</i> (Pallas)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

愛知県では、1980年代では、県内の丘陵地から低山地に広く分布し、知多半島にも分布していたが、2000年代に入ってから、非常に少なくなり、尾張地区や三河部の丘陵地で、わずかな記録が出る程度になった。岡崎市でも、1970年代から1980年にかけては、市の東部の丘陵地に広く分布し、大幡町、池金町、竜泉寺町、本宿町で記録があり、ヒョウモンチョウ類の中では少ない種ではなかった。しかし、1990年頃からは激減し、最近では記録がない。

本種を保全していくためには、本種が丘陵地に囲まれた草原や湿地帯の周辺の草むらに生息しているので、まず、このような環境を保全していくことが大切である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

【 種の概要 】

和名は、翅の裏に銀の筋がある豹柄の斑紋をもつチョウという意味である。

年1回の発生で、成虫は、6月上旬から7月にかけて現れる。8月には夏眠し姿を消すが、9月になると再び現れ、10月まで見られることがある。アザミ類やシシウドなどの花によく集まり、獣糞にも集まることがある。他のヒョウモンチョウ類と一緒に飛んでいることも多い。幼虫の食草はタチツボスミレなどの野生のスミレ類で、幼虫のまま越冬し、5月に蛹化する。

近似種に、オオウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョウモンの雄がいるが、本種は、前翅の翅形が丸みを帯びることや前翅裏面の中央部に白斑が数個現れることで区別することができる。



♂ (裏面)

岡崎市竜泉寺町、1980年6月15日、杉坂美典 採集

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 084	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
オオウラギンスジヒョウモン <i>Argyronome rursana</i> (Motschulsky)		

【 選定理由・現在の生息状況 】

岡崎市では、1970年代、1980年代では、小呂町、池金町、美合町、本宿町、高隆寺町などで発生しており、数頭がアザミの花に集まっているのを確認することができた。しかし、2000年を過ぎたころから記録が少なくなり、現在では、小呂町、八ツ木町などで、年間に数頭の記録が辛うじて出る程度になった。

保全にあたっては、丘陵地の周辺の草原や山間にある水田周りの畦道や農道にある草むらに適度に人手が入り、多様な植物が繁茂できる環境を保全していくことが大切である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

和名は、近似種のウラギンスジヒョウモンより大型になることに由来している。

年1回の発生で、成虫は、6月上旬から中旬にかけて発生し、盛夏は姿を消すが、9月になると再び現れ、10月まで見られる。

丘陵地の林道沿いの草原や溪流沿いの草地などに見られ、アザミ類などいろいろな花で吸蜜する。幼虫は、タチツボスミレなどの多くの種類のスミレ科の植物を食べ、越冬は、卵もしくは初齢幼虫で行われる。

ウラギンスジヒョウモンによく似ているが、やや大型となり、前翅の外側の先端部が外に張り出し、前翅の輪郭は中央部がやや凹んで見える。後翅の下部は、下方に少し伸び、下方に垂れ下がっているような形状になる。



♂ (裏面)

岡崎市高隆寺町、2010年6月6日、杉坂美典 採集

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 085	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
クモガタヒョウモン <i>Nephargynnis anadyomene</i> (C.Felder et R.Felder)		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市に生息するヒョウモンチョウ類の中では、最も記録が少ないチョウである。1980年代から90年代にかけては、岡崎市内において、数年に1度、記録が出る程度であった。2006年、額田郡が岡崎市に合併され、本種の発生地として本宮山の闇苧溪谷や本宮山の西麓一帯が加わったため、東北部の丘陵地に過去の記録が点在する状況になった。しかし、最近では、ほとんど記録がなく、2011年に八ツ木町で1頭が写真撮影されただけである。

保全にあたっては、食草のスミレ類が生育できる環境を守っていくことが大切で、荒地や草原を含む里山に適度な光が当たるような環境を作れるよう、積極的に人手を加えていくことが必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

もよう

和名は、後翅裏面に雲の形の模様があることからつけられたものである。

他のヒョウモンチョウ類と比べると、山頂性が強く、本宮山山頂や高隆寺町にある岡崎市中央総合公園などの小高い丘にある草原で記録されている。

年1回の発生で、成虫は、5月中旬から10月下旬まで見られ、ヒョウモンチョウ類の中では最も早く出現し、最も遅くまで見られる。盛夏は夏眠する習性がある。

ゆるやかに飛びながら各種の花を訪れ、アザミ類、ウツギ、オカトラノオなどで吸蜜したり、路上で吸水したりすることも報告されている。

幼虫の食草は、各種のスミレ類で、幼虫で越冬する。

独特の斑紋をしており、翅の表面には、楕円形の黒斑が点在する。後翅裏面は本種特有の一樣なオリーブ色であるため、近似種はいない。雌は前翅表先端付近に白紋があり、市内に分布するヒョウモンチョウ類の中では最大となる。



♂
岡崎市高隆寺町，2003年6月15日，杉坂美典 採集

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 086	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
ウラギンヒョウモン <i>Fabriciana adippe</i> ([Denis et Schiffermüller])		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市では、1970年代から1980年代、保母町、池金町、須淵町、大幡町の草原には少なくとも、本宮山の西麓にある各所の草原では、かなりまとまった数の個体が発生していた。しかし、1990年以降、激減し始め、2000年を過ぎてからは全く記録がない。市内で記録されているヒョウモンチョウ類7種の中では、最も激減した種である。

保全にあたっては、里山に適度な人手が入り、多様な生物が生育できる環境を作っていくことが必要である。

【種の概要】

ヒョウモンチョウ類の中では大型である。裏面には、銀白色の斑紋が散らばっているため、この名前がついている。

年1回の発生で、6月上旬から10月まで見られる。アザミ類やオカトラノオで吸蜜する姿がよく見られた。幼虫の食草は、各種のスミレ類で、越冬は、卵の中で幼虫になったままか、1齢幼虫で行われる。

本種の減少傾向は、全国的なものである。特に、丘陵地や低山地において、その傾向が著しい。ツマグロヒョウモンが爆発的に増えていることによって、食草の競合が起こり、他のヒョウモンチョウ類が減少している可能性は否定できない。

市内に産するヒョウモンチョウ類では、裏面の斑紋が独特であり近似種はいない。



♂ (裏面)
岡崎市竜泉寺町，1980年6月15日，杉坂美典 採集

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 087	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
ミスジチョウ <i>Neptis phillyra</i> Ménétriès		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市では、2009年6月に本宮山の闇苧溪谷で初記録が出た。その後は、毎年、同地点で発生しているが少なく、他の場所では記録がない。

闇苧溪谷では、入口付近から2km程上流までに点在するカエデ類の周辺に生息し、その発生地は極めて狭い。市外の産地では、年々減少傾向にあり、本市でも農薬散布が行われれば、姿を消す可能性は高い。

保全には、闇苧溪谷の環境を守っていくことが重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

年1回の発生で、5月下旬から6月上旬にかけて羽化し、7月まで見られる。低山地や溪谷に多く見られ、樹上を滑空するように飛翔し、葉上で翅を開いて静止することが多い。駐車場のような小石が敷き詰められたような場所に飛来し、地上で吸水したり、獣糞に飛来したりすることも多い。

幼虫は、イタヤカエデ、イロハモミジなどカエデ類の葉を食べて育つ。食草の葉を小さく切つてぶら下げ、葉の中脈を露出させてその先端部に台座を作り静止するという特異な習性をしている。越冬は、幼虫の状態で行われる。幼虫は葉柄を糸で綴って補強し、葉を集めて巣を作ったりはせず、その葉上で静止したまま冬を越す。

したがって、発生地では、冬になってもカエデ類に枯れた葉が吹き飛ばされずに残っている場合、本種の幼虫がそこで越冬している可能性が高い。

近縁種には、コムスジ、オオミスジがある。本種は、前翅の中室にある白線が直線状に延びるが、コムスジでは、その先端が三角形の斑紋となって分離し、オオミスジでは、白線の前縁側がジグザグになることで区別することができる。

(執筆者 杉坂美典)



岡崎市石原町, 2011年6月4日, 杉坂美典 撮影

昆虫類 088	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
オオミスジ <i>Neptis alwina</i> (Bremer et Grey)		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市では、1980年代から1990年代まで、田口町と石原町のウメ林の周辺で少数が発生していたが、2000年以降は記録がない。食樹は、ウメ、アンズ、スモモ、モモ、ユスラウメ、サクラ類などのバラ科植物である。そのため、山間の森林には少なく、山村の集落周辺によく見られる。集落周辺で栽培されているウメの木など農作物を食草としている場合は、農薬散布によって絶滅することも多い。

保全にあたっては、無農薬で栽培を行っていて、適度に管理されているような発生地をなくさないようにしていくことが重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

愛知県では、東北部の山地帯に広く分布するが、その産地は局部的である。

年1回の発生で、岡崎市では、6月上旬から見られ、8月に入ってもかなり新鮮な個体が記録されたこともある。

ミスジチョウ類の中では、最も大型となり、特に♀は大きい。

食樹の上空を優雅に滑空し、時々葉上に静止し、地面に降りて吸水することもある。

山村の集落周辺にあった発生地の梅林が、過疎化によって放置され、雑木林化したことによって、本種が姿を消したことも報告されている。適度に人手が加わり、日当たりや風通しがよい環境を好むという、人への依存度の高いチョウである。

越冬態は幼虫で行われ、越冬のための巣は作らず、枝の分岐部やくぼみに糸をかけて静止し、越冬する。

(執筆者 杉坂美典)



♀
岡崎市石原町, 1998年7月21日, 杉坂美典 採集

昆虫類 089	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
スミナガシ <i>Dichorragia nesimachus</i> Doyère		

【 選定理由・現在の生息状況 】

愛知県では、東北部の山地帯に発生地が点在し、岡崎市がその南限に当たる。岡崎市では、本宮山の西麓の東河原町、石原町に生息し、舞木町にも記録がある。闇荊溪谷では、春の記録が比較的多いが、その発生数は少なく、年間に数頭の記録が出る程度である。市外の発生地では、食草のアワブキやヤマビワが減少傾向にあり、本種も少なくなっている。

保全には、発生地の食草を守っていくことが重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

南方系のチョウで、東南アジアの島々には近似種や別亜種が多い。

年2回の発生で、5月上旬から6月、7月から8月にかけて発生する。

成虫は、花を訪れることはなく、春は獣糞や腐果、夏はクヌギやアベマキの樹液や獣糞、腐果に集まる。雄は、葉の先端に止まって縄張り行動をし、夕方には盛んに飛び回る。

幼虫は、食草を食べる際、独特の食べ方をし、葉の先端から中脈を残す。幼虫は、残した中脈の先端を定位置として静止する習性がある。幼虫の体形は、成長するに従って大きく変化する。特に2本の触角の長さを見れば、何齢幼虫なのか分かりやすい。

蛹化は、食樹の近くにあつて枯れ葉が着いているような低木で行われる。蛹は枯れ葉そっくりの形状をしており、とても見つけにくい。越冬は、蛹で行われる。国内には近似種はいない。
(執筆者 杉坂美典)



岡崎市東河原町，2011年5月4日，杉坂美典 撮影

昆虫類 090	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
サカハチチョウ <i>Araschnia burejana</i> Bremer		

【 選定理由・現在の生息状況 】

岡崎市では、1980年から1990年にかけては、本宮山の闇荊溪谷で時々見られるチョウであったが、その後は激減し、2000年以降では、2004年に1頭が記録された以外は記録がない。市外の発生地でも減少傾向にあり、本種の発生地が溪谷沿いの草地であることが多く、溪谷沿いの山林に人手が入らなくなったことによって放置林が多くなり、日当たりが悪くなったことによる環境の変化が影響しているようである。

保全にあたっては、闇荊溪谷の環境を保っていくことが大切である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

年2回の発生で、4月下旬から6月に出現する春型と7月上旬から8月にかけて見られる夏型がある。

出現期によって、翅の斑紋が著しく変化するチョウで、春型の翅表は、赤褐色と黒褐色の斑紋が散らばり、逆さになった八の字の白帯が目立つ。夏型は、赤褐色が消え、逆八の字の白帯が顕著になる。

低山地の溪谷周辺に生息することが多く、白色の花を好み、地上や葉上にすぐに止まる習性がある。

幼虫の食草は、イラクサ、コアカソなどのイラクサ科の植物である。

本種の夏型は、イチモンジチョウに似ているが、本種の方がやや小型で、前後翅の表面の亜外縁に赤褐色の帯があり、イチモンジチョウには、赤褐色帯がないので区別することができる。

(執筆者 杉坂美典)



岡崎市石原町，2004年4月29日，杉坂美典 撮影

昆虫類 091	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
オオムラサキ <i>Sasakia charonda</i> (Hewitson)		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市では、1970年代から1990年代までは、市の東部を流れる乙川や男川水系に広く分布しており、稀ではあるが平野部にも飛来し、甲山（かぶとやま）や岡崎公園でも記録された。しかし、2000年代からは記録が少なくなり、成虫の記録はほとんどない。幼虫の分布調査では、乙川や男川の堤防付近に生えるエノキの周辺で、年間、数頭が見つかる程度である。

越冬態は幼虫で、エノキの根元周辺の枯れ葉で行われるので、枯れ葉を除去されると姿を消す。本種の保護には、発生地のエノキには、人手を入れないようにすることが必要である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	準絶滅危惧

【種の概要】

日本産のタテハチョウ科では最大の大きさになり、特に雌は大型になり、日本の国蝶である。

年1回の発生で、成虫は6月中旬頃から7月にかけて見ることができ、稀には、8月になっても記録が出ることもある。力強く飛翔し、滑空するように飛ぶが、あまり長く飛び回らず、枝の先端や葉上、太い幹などに止まる習性がある。

クヌギやコナラなどの樹液に集まることが多く、獣糞や腐果にも集まるが、花には来ない。発生地では、カブトムシやクワガタと樹液を奪い合っている光景を見ることができる。

幼虫の食樹はエノキで、12月頃になると幹を伝って地面に降り、根元周辺にある枯れ葉の裏面で冬を越す。したがって、分布調査は、幼虫を探すのが容易である。幼虫は、ゴマダラチョウの幼虫と酷似している。ゴマダラチョウの幼虫も、本種と同じ様にエノキの根元の枯れ葉の裏面で越冬している。ゴマダラチョウの幼虫との違いは、幼虫の背にある大きな突起が、本種は4対、ゴマダラチョウでは3対となることである。成虫の近似種はいない。



岡崎市秦梨町，2009年6月25日，杉坂美典 採集

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 092	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
オオヒカゲ <i>Ninguta schrenckii</i> (Ménétrières)		

【選定理由・現在の生息状況】

岡崎市では、東北部の山地に局部的に発生しており、北部、中部、東部の3つの発生地がある。北部の発生地は、奥殿町、八ツ木町である。中部の発生地は、小呂町、高隆寺町、田口町、秦梨町、須湊町、蔵次町である。東部の発生地は、石原町である。

1980年代から2013年まで各所で記録が出ているが個体数は少なく、年間数頭の記録が出る程度である。

保全にあたっては、食草のカヤツリグサ科のスゲ類が湿地に生えるため、湿地の環境を保っていくことが重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

【種の概要】

日本産ジャノメチョウ亜科の最大種である。

年1回の発生で、6月中旬から10月上旬まで見られる。

山間の水田の周辺、湿地などが主な発生地である。成虫は、朝と夕方や曇天時に活発に活動し、日影や樹間を好んで飛翔する。夕方には、雑木林を離れて、林縁を飛ぶことも多い。飛び方は遅く、しかも長く飛び続けることはなく、樹幹や葉に直ぐに止まるが、人の気配には敏感なので、近付くことは容易ではない。

訪花性はなく、クヌギ、コナラ、ヤナギ類の樹液によく集まる。

幼虫の食草は主にカヤツリグサ科のスゲ類で、2～3齢幼虫で越冬する。

成虫は、独特な斑紋をしており、近似種はいない。



岡崎市小呂町，2012年6月24日，杉坂美典 撮影

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 093	チョウ目 シャクガ科	岡崎市 情報不足
ホシシャク <i>Naxa seriaria</i> (Motschulsky)		

【選定理由・現在の生息状況】

愛知県下の記録は、これまで豊田市において唯一の報告がある。市内ではおかざき自然体験の森（岡崎市八ツ木町）にて街灯に誘われた個体を採集したが、1個体と情報不足は歪めない。

おかざき自然体験の森のエリア内には、食樹であるイボタやネズミモチは普通に産している。しかし、これらにホシシャクガの成虫が群がって飛ぶという様子もなく、生息状況はよく分からないというのが現状である。当地近隣で発生しているのか注意深く調査する必要がある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

開帳 21～28mm と小型の蛾である。明瞭な模様は、他種と間違えることはない。日本全国に広く生息しているが、県下では豊田市の記録が 1978 年とあり古く、その後は採集されていないようだ。市内の記録は県下で 2 例目となる。

本種の幼虫は群れて生息する習性があり、成虫も数多く見出せる。また、飛翔力は弱く大きく移動することは考えにくい。そのため、成虫がいたということは、その近隣に多数生息している可能性が高い。加えて、幼虫が餌とするモクセイ科のイボタ、ネズミモチは決して珍しいものではなく、市内の山間部には広く分布している。本種が安定して生息している可能性を秘めている。



岡崎市八ツ木町，2010年7月8日，三浦重光 採集

【関連文献】

- 井上 寛ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.
 三浦重光，1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.853-972. 新編岡崎市史編さん委員会.
 田中 蕃ほか，1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.
 間野隆裕ほか，2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ昆虫類: 181-323. 資料編Ⅴ昆虫類: 105-385. 豊田市.
 (執筆者 三浦重光)

昆虫類 094	チョウ目 シャクガ科	岡崎市 情報不足
ヒメウコンエダシャク <i>Corymica arnearia</i> Walker		

【選定理由・現在の生息状況】

愛知県下の記録は、市内の記録が唯一である。場所は田口町にある常磐南小学校の周辺である。記録が古いので、現状は良くわからない。

当時は田口町で毎年少ないなりに発生を繰り返していた。ただし、学校周辺の環境は未だ大きく変化していないことから現在でも生息している可能性は高いと考える。市内の発生期は 5～6 月に限って採れているが、他県では 7～9 月にも出現しており、むしろその時期の方が多いらしい。今後の調査しだいといえるが、大変貴重な種であることに違いない。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【種の概要】

開帳 22～26mm と小型の蛾である。地色は黄色で前翅頂から外縁前半にうこん色を有する。♂の前翅基部には半透明の刻孔がある。また、雌雄共に前翅後縁の中央に白色の環状紋がある。

関東以西の太平洋側とか瀬戸内海沿岸部に生息する暖地系の蛾類である。しかし、日本海側の島根県にも記録がある。発生状況は大きく異なり、多産するところもあるようだ。近県の産地は岐阜県、静岡県である。

生活史や生態は現在のところ不明であり、この地において具体的な対策は取りようがない。市内の産地が、今後どのように変わっていくかは知る由ではないが危惧されることに違いはない。



岡崎市田口町，1980年6月3日，三浦重光 採集

【関連文献】

- 三浦重光，1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.853-972. 新編岡崎市史編さん委員会.
 田中 蕃ほか，1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.
 間野隆裕ほか，2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ昆虫類: 181-323. 資料編Ⅴ昆虫類: 105-385. 豊田市.
 (執筆者 三浦重光)

昆虫類 095	チョウ目 スズメガ科	岡崎市 情報不足
メンガタスズメ <i>Acherontia styx medusa</i> Moore		

【 選定理由・現在の生息状況 】

愛知県下では意外と記録がなく豊根村において唯一の報告がある。これまで市内では、恵田町とおかざき自然体験の森（八ツ木町）にて採集されているがいずれも発生数は少ない。おかざき自然体験の森では、平成20年以来、毎年、管理棟南西側端の軒先に身を潜めている個体を見出している。幼虫が何を食しているかは分からないが、植物の種類が豊富な地であることから世代交代が確実に行われているようだ。それでも発生数は大変少なく厳しく現状を見ていく必要はある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

開帳 85～110mm と大型の蛾である。胸部背面には人面模様がある。本州の関東以西、四国、九州に生息しているが、愛知県下ではなぜか珍しい。幼虫の食草が農作物のゴマ、ナスなどであることから、ナスを栽培する農家は多いにも関わらず、農家の消毒が行き届き、発生数が抑えられているのかもしれない。

市内では、近年、クロメンガタスズメの進出が著しく多産し、本種と共に出現している。その発生期はややずれており、クロメンガタスズメが6月下旬から現れるのに対して、本種は7月下旬から8月上旬にかけて遅れて出てくることが多い。2化は確認されていない。



岡崎市八ツ木町，2009年8月1日，三浦重光 撮影

【 関連文献 】

- 井上 寛ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.
 三浦重光，1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.853-972. 新編岡崎市史編さん委員会.
 田中 蕃ほか，1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.
 間野隆裕ほか，2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ昆虫類: 105-385. 豊田市.
 (執筆者 三浦重光)

昆虫類 096	チョウ目 スズメガ科	岡崎市 情報不足
オオシモフリスズメ <i>langia zenzeroides nawai</i> Rothschild et Jordan		

【 選定理由・現在の生息状況 】

市内では北部の奥殿小学校付近が唯一の産地になっている。奥殿小学校では毎年のように体育館街灯に飛来しているようだ。

この地は豊田市に隣接し、豊田市の分布域と繋がりが大きく関連しているように思われる。今のところ、この産地が拡大している様子もなく、また、絶えてしまうという心配もないようであるが、極限られた狭いところで産しているだけに先行きは心配である。今後の調査で、新たな産地が見つかるかもしれないが、現状は大切にしていきたいところである。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

【 種の概要 】

開帳 140～160mm。前翅は長く鋭い上に、外縁は鋸歯状である。また、胴も太く日本最大のスズメガである。本種の幼虫は、ウメ、モモ、ソメイヨシノといった果樹や庭木として人為的に植栽されたものを食すため、人との生活に関わりが多く、生息状況の影響を受けやすい。

愛知県下では、尾張から三河の山間部で広く産している。渥美町にも記録がある。早春の蛾であるため人目につきにくいですが、街灯にはよく飛来するので知る人ぞ知る蛾である。また、愛知県が太平洋側の東限になっており、重要な種に変わりはない。鈴木栄二氏が岡崎市の初記録者である。



岡崎市奥殿町，2000年4月12日，三浦重光 採集

【 関連文献 】

- 鈴木栄二ほか，2002. ふるさと自然散歩. 奥殿学区社教.
 井上 寛ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.
 三浦重光，1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.853-972. 新編岡崎市史編さん委員会.
 田中 蕃ほか，1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.
 (執筆者 三浦重光)

エゾスジヨトウ *Doerriesa striata* (Staudinger)

【 選定理由・現在の生息状況 】

愛知県の準絶滅危惧種に選定されている。市内の記録は全国で 2 番目の産地となり、その後、各地で記録されるようになった。加えて、市内で採集された個体は雌であったため、雌としては全国で最初の記録となり謂れのある蛾である。採集地は箱柳町にある伊賀川上流溜池の端にある湿地帯である。現場は、採集してから 30 余年が経ち、大きく環境が変わっている。今は新興住宅地と隣接しているため、この地で本種が生息しているかは全く分からない。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

【 種の概要 】

開帳 20~26mm。前翅の先がとがり、色は灰褐色に橙褐色を混じる。県内では瀬戸市、豊田市で記録されているが、どこも数が少ないようで詳しい生態が分かっていない。食草は不明であるため具体的な保護策が取られないのが現状である。

なお、市内では松井直人氏が本宿町にて記録していることから調査が進めば、新たな産地を市内から見出すことも可能ではと考える。しかしながら、本種は湿地などを好んで生息する蛾であり、開発等の犠牲になることは十分に予想される。現在、市内の土地事情は湿地が年々減少しているだけに、調査を急がないと市内から絶滅する恐れは十分にある。

【 関連文献 】

井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.

三浦重光, 1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.853-972. 新編岡崎市史編さん委員会.

田中 蕃ほか, 1991. 愛知県の蛾類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.

間野隆裕ほか, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書: 本編Ⅶ昆虫類: 181-323. 資料編Ⅴ昆虫類: 105-385. 豊田市.

(執筆者 三浦重光)



岡崎市箱柳町, 1980年8月16日, 三浦重光 採集